



未来という選択

黒田インターナショナルコンサルティング

黒田 毅

自己の未熟さという欠如は、社会の通念という絶対判断への迎合を得る。これは他への迎合という現実である。他への迎合は、自己の喪失を得る。しかし生の必要性は、これを肯定する。これらは文明世界が、自己の確固たる確立を知性ととともに必要とすることを示す。自己の自立は他への隷属を得ない自己であり、これは人間能力と社会能力の育成において可能である。他への隷属が詭弁を与え、誤りを生むのである。これは生存という絶対性はこれらを肯定するのである。自己の育成は正しい成長と学習において自立した自己を求める。他方において社会は脅迫性において自己を要求する。

これは認識の拡大が自己の成長であり、社会は優位性において判断を得るのでなく、共生と寛容さにおいて自己を与えることができる。これは優位性という判断が、排除を生むことと相違する。

これらは生存という絶対性が対立と争いを生むことへの警鐘である。過去という原始時代は、生存における戦争を有したのである。

これは知性の進歩が、これら生存における争いから、平和共存への転換を得ることは、地球の有する進歩性における新しい未来の創造なのである。

これらは宇宙との協力においてかけがえのない未来という選択が存在するのである。

これらはバイシスという対立から、アクエリアスという融和への世界の転換である。

共存は、唯一の世界の選択である。技術進歩は争いにおいて世界の破滅を与えるのである。これらは理性における世界の要求であり、進歩が世界を行う必要性である。

これらは平和という合意であり、これらが唯一未来を可能とするのである。